やまさき文化

'83-2 * No.2

山崎町文化連盟編集発行

機関誌「やまさき文化」第二号発刊に際して

壺阪　壽

山崎の自然は実に美しい。四季折々の変化をこまかく表現してくれる様子は、何とも例えようがないと思われます。むしろそこに住んでいる吾々が、そんなに美しい自然が、吾々の手近な所に在ることに気付かないで、他から来た人が、感じ入るようです。そして、その上に山崎には此の美しい自然同様に、色々な方面でその土地に根を下した住民の立派な文化があります。俳句・小説・詩歌・戯曲・書画等々、町内で育てられた地域文化が随分と永い年月の間私等の周囲にあり、それぞれの部門で町民の皆様方が御活動されており、しかも其の水準が随分高い所に在るように思われます。私も時折色々な文化活動をされている場に出席させていたゞく機会がありますが、本当に唯々感心させられるばかりであります。

扨、山崎文化連盟には十九の構成団体で成っていますが、其の全団体が一堂に会し合うといった機会は仲々ありません。そこで、機関誌を定期的に発行し紙面を通じて此の十九の団体が相互に理解を深め、そして又、自分等の文化活動の発表の場として大いに御活用いたゞきたいと考える次第であります。それと同時に此の機関誌の内容を高めてゆくことにより、吾々文化連盟の最大の念願であります、地域文化が一層向上してまいりますようになれば幸いと思う次第です。

又、第二号を発刊されるまで、関係の役員の皆様には一方ならぬ御苦労をされましたことに対し厚くお礼を申し上げ、更に次号へ大きく飛躍されることを念願致します。

やまさき文化
83/2

目次

やまさき文化第二号発刊に際して　壺阪　壽 ②
老ノハテニ　浅田耕三 ③
高橋たか子を読む　安井道夫 ⑤
傀儡子目代の話　荒木俊介 ⑦
事務局雑報　福山清一 ⑩
【各部雑感】
短歌　藤村省三 ⑪
中野の獅子舞について　和田疎人 ⑫
第二回山崎町俳句大会　郷土研史跡部 ⑬
山崎町の史跡　杉元清美 ⑭
新潮会結成三〇周年を迎えて　前野四郎 ⑮
山崎囲碁同好会と大井萬兵衛翁　小川　登 ⑯
奉賛吟道大会について　伊藤親保 ⑯
サンデー秀句会　谷川善勝 ⑰
チャリティー茶会によせて　Y生 ⑰
将棋の魅力　北川智恵 ⑱
山崎の茶華道のあゆみ　田内竹男 ⑱
さつきとともに花の文化を高めよう　菊岡美智子 ⑲
「箏」について　秦　耕三 ⑲
山崎小唄会の流れ　名賀一二 ⑳
文楽の鑑賞　根岸元彦 ⑳
編集後記

表紙　題字／尾崎正一・カット／福岡久蔵

老ノハテニ

山崎文学会　浅田　耕三

「橘則光という人物がいますやろ」
「橘則光？　ああ、あの枕草子の」
「そう、それに今昔物語。あれを典拠にしたら、ええ話できますやろな」
「ええっとどんな話でしたかいな」
相手は安川さん、話は小説の種さがし。スタンドバーを二、三軒まわって、二人共、かなりもう酩酊していた。
そんならと、少々回らぬ舌で一席――。

――陸奥前司橘則光の若い時の話である。
一条天皇のころ、衛府の蔵人として仕えていたが、ある夜、女の所へ行こうと内裏の宿直所をこっそり抜け出た。
夜は更けていた。
小舎人童一人を連れて大宮大路を南へ下っていると、大きな垣のくらがりに数人の人影がひそんでいるのが見えた。とたん、則光は全身凍りつくような恐怖をおぼえ、足早に通り過ぎようとした。と、はたしてその暗がりから凄味のある声がとんできた。

「やい待てッ、そこへ行く奴」
則光はぱっと地に伏せてそっちを窺った。白刃が月光にキラリと光ったが、弓はないらしい。
逃げられるッ、咄嗟にそう判断し、背を丸めて必死に走った。だが、凄じい足音がたちまちうしろへ。
駄目だ、頭をやられるッ――
築地の切れ目の路地へ、横っ跳びに飛びのいた。うしろの男、勢い余ってどどっとたたらを踏むのをやり過ごすや、抜き打ちに一太刀。後頭部深く打ち割られて男はどっとたおれる。噴き出す血しぶきが霧のように顔にかかった。
「どうしたッ」
二人目が喚きながら追ってきた。
抜身を小脇にかいこみ、無我夢中で坂道を駆けおりたがおそろしく足の早い奴、あっというまに追いついてきた。
今度こそやられる――
則光はやぶれかぶれ、不意にしゃがんだ。と、背に激しい衝撃、がくんと前へつんのめる。かろうじて踏みとどまり、立上がった時、つまずいた奴はぶざまに地面へ匍い、腰でも打ったか必死にもがくその脳天へ渾身の一撃。
「おのれよくもッ」
又一人追ってきた。雲つくような大男。
「仏神助け給え」
唱えて振り向き、太刀を鉾の如く双手に握って腰にため、勢い込んで走ってきたのへ、真正面から腹をぶつけるように突っ込んだ。
刀は敵の腹へずぶりと突っ立って背まで抜けた。やっと気合をかけて引き抜き、のけざまに倒れる所を、下から擦り上げるように二ノ太刀を一閃させる。刀を持った相手の右腕は肩の付根から落ちた。
大路を泣きながら歩いていた小舎人童を呼び、着替えをとってこさせて、血のついた衣、指貫と着替え、手足や顔、太刀を念入りに洗い、小舎人童には固く口止めしておいて何くわぬ顔して宿直所へ帰って寝た。
眼をつむったがなかなか眠れぬ。
おれの仕業ともし知れたら――
何とも心配でやりきれぬ。検非違使がさぞうるさかろう。閑な公家共の恰好の話題にされるのか――。
やっと朝になる。はたして大騒ぎが始まった。
「大炊の御門のあたりに大男三人斬られて死んでるぞ。同じ刀の使い様だが何とも凄い切り口だ」
きいた殿上人達、われもわれもと見物の車に乗り込んで、
「お前もどうだ」
則光は観念した。仕方がない、ことわるとかえって怪しまれる。
車にこぼれる程乗って現場へ行ってみると死骸はまだゆうべの儘。だがそばに妙な男がいた。齢三十ぐらい、すごい髭面、無地の袴に紺の洗いざらしの襖、山吹色の上衣の袖赤茶けたのを着て、猪の逆頬の尻鞘の太刀をさし、鹿皮の沓履いて胸を叩いては死骸を指さしつつ、と向きこう向きしてしゃべっている。
「何だ、あの男」
雑色が一人、主人のいいつけで駆けていく。
「三人を斬り殺したのは自分だ、といっております」
えッ、則光の目が輝いた。
「呼べ」

主人に命ぜられた雑色がまた呼びに走る。

頬骨の張った、鷲鼻で赤毛の、件の男は、呼ばれて車の傍へやってきた。目を血走らせ、片膝立てて太刀の柄に手をかけ、見るもおそろしげな顔付でいう。

「ゆうべここを通りかかると、此奴等三人走りかかってきたゆえ、盗人であろうと即座に斬り伏せたが、今朝見ると、このおれを長年つけ狙っていた敵共でござった。今、首を斬り落とす所だ」

みなほうほうと感心して次々訊くものだから、いよいよ得意になって気が狂ったように身ぶりしつつしゃべる。

きいている則光はおかしいやら嬉しいやら。世の中、変わった奴がいるものだ——。

その晩則光は、昨夜逢いそこねた女とあう。

「見たかったワ、私」

夢みるように女がいう。

「何を？」

「昨夜大炊御門で荒夷共を三人も斬ったってお方。そりゃ眉の凜々しい男らしい方だったそうよ。その上お強いのだから立派なものねェ。何といったってやっぱり男は強いのが一番。そこへいくとあなたなんか……ねェ」

「おれなんか、——駄目か」

鼻毛か何か抜きながらもそりと則光はいう。格別気を悪くした風もない。

「そっちが駄目ならせめて学問でもねェ。橘氏という歴とした学問の家筋の出なんですもの。『金葉集』のただ一首じゃあまり何でもさびし過ぎるじゃないの」

「おれは歌なんか性に合わん」

「大体あなたは自分をよく見せようという気がまるでないのよ。学歴自慢、地位自慢、世の中みな自慢自慢で渦巻いているというのに。だからいつ迄も頭の中将藤原斉信づれの家司から抜けられないのよ。——でもまあ、私は……」

「——そういうおれだから好きなんだろ」

「そうなの。おかしいわね、ほんとに。なぜこうなんでしょう」

ちょっと待った。安川さんが口をはさむ。

「思い出した。『橘則光切殺人語』。その晩女とあった、という所からは作り話やないか、お前さんの」

「そう？　そうだったかな」

「ま、よろしい。どうせ座興、話相手になりましょ。で、その相手の女は？」

「もちろん清少納言、他に誰がいますか」

「けど彼女の夫というのは、いろいろ説がありますのやろ。橘則光、藤原棟世、藤原理能、藤原実方——」

「いやこれはもう絶対です。あの八十六段、そう、枕草子の。二人の仲の何よりの証拠やないですか、あれ」

——「蘭省の花の時の錦の帳のもと」

頭の中将がそう書いておくる。彼女は炭櫃の消炭をとって余白に、

「草の庵をたれかたずねむ」

その才のあまりの見事さに、みなみな唸り、拍手をおくったが、さて返しの上の句ができぬ。額を集めて一晩中唸ったが結局できない。

その翌日の則光と彼女のやりとりがよい。あちこちさがして息せき切って彼女にしらせにくる則光が何ともさわやかで、純朴、真正直な彼の息づかい迄が聞こえてきそうだ。

「きみの返事に昨夜はみな大騒ぎしてねェ」

「そう、そんなに」

「きみがほめられるのが、何といったっておれは一番嬉しいな。これに比べたら司召に少々よい官（役職）をもらうのなど、むなしいものさ。とにかく昨夜はきみに早く知らせたくて、よく眠れなかったよ」

普段の彼とは違う。ひどく饒舌だ。

「おい、せうとの則光、お前には、この文のみやびなどわかるまいが、お前のいもうとというのは、ほんとに素晴らしいねェ。全く不思議としかいいようがないよ。どうして彼女ほどの者がなあ……」

感に湛えぬように則光の顔をしみじみつめる公家衆もいる。

「はあ？　おかしいですか。そんなに」

とぼけた顔で則光は見返す。公家の方はやっかみ八分。だがそんなことに気を回す則光ではない。

「おいせうと、せうとの君」

そういってしつこくからかうのもいて語尾にやっぱりねたましさがのぞく。則光はにこにこと返事する。おおらかである。

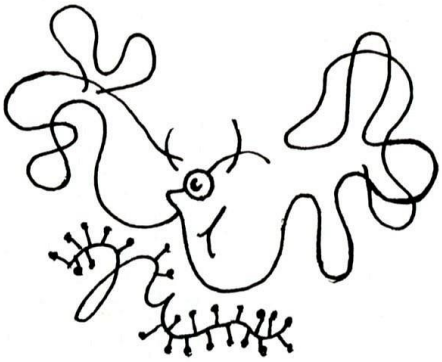
いもうと、せうとはやがて二人の別称となった。

「私がいもうと、則光がせうと、二人がそう呼ぶ間柄なのは、主上までもよく御存知のこと——同じ八十六段の中で彼女自身がそう書いていますな。いもうと、せうとは親密な男女の仲の呼び方ですやろ。あれ程の才女、やっぱり男を観る目はちゃんと持っていたんですねェ。そりゃちゃちな学識や地位をひけらかす男など、彼女の目から見ればあほうだったでっしゃろ。朴訥でヌーボーとした則光のような男に惚れたというのは、ようわかりますな。あの橘則長というのは、この二人の間にできた子でっせ。これはもう間違いありません」

「そんならまあそれはそれとして——。たしかにこれはええ話ですな。三人相手の息づまるような闘争の活写と、似而非者のとりあわせがおもしろい」

「そうですやろ。それから結びの一行がきいとります。年老いてもう先もあまり長くなくなったある日、則光はぽつりと子供らに打明ける。はずかしい話じゃが、実はわしの若い頃にな——。よろしいなあ、やっぱり。老ノハテニ子供ニ向テ語リケル。さりげのうてね」

高橋たか子を読む



山崎文学会
安井道夫

どれか手あたり次第に一冊の小説を読み始める。それが世に名作といわれるほどのものであるのなら、すんなりと物語の世界に感情移入もできることだろう。ただし、物語の中でさまざまな体験が織りなす人生のわびしさが、ふつふつと煮えたつような趣きを現わそうが、私はきまって、これではないのだという軽い失望を味わってきた。それらはあくまで色どり鮮かなだけで同じ一つの平面の出来事ではないか。もう一つ何かがある。ほんの目の前に見えかくれしておりながら、実に不思議なくらい誰にも捉えられていない。

何だろうかと思う。こうして書物を読み始めてみても、その活字の意味ではなく、活字の向うの虚空の方へ、その中の聖性にも似た誘惑の、それでいて未だはっきりしない不安にだけ引きつけられているようで、はっと気付いて驚くことがある。

高橋たか子の殆どの小説は、薄氷を踏むような日常性の中の、ひび割れた部分を「何だろうか。」と怪しみ恐れながら、無防備に内部へ落ち込んで行き、やがては生活の附属物を一枚一枚はがしていって裸になってしまった孤独な女たちの物語である。

『ロンリー・ウーマン』の中に「お告げ」という短編がある。何の疑いもなく無瑕な結婚生活をおくっていて、突然交通事故で夫を失う女の話である。女は、夫が生前決して見せたことのない不気味な姿を繰返し夢に見るようになる。夢がだんだんと現実を浸蝕していく。

もともとそれは誰にでもあるかすかな感情で、意識のさし出す網の目から何ほどの痕跡も残さずに落ちこぼれていって、内部へ内部へと溜っていく思い。それがふとしたきっかけで呼びだされ、そのきっかけの思いとは不釣り合いなまでに膨大な無意識世界の感情がぶら下り、もう何もかもかなぐり捨てて裸に近くなった女の魂に執拗に襲いかかってくるのである。

三年間の「ほとんど完璧に薔薇色の記憶だけを残して」死んでいった夫、あれは仮面だったのか、なぜあれほどまでに完璧であったのか、と女は考え、またしても次々と夫と関係していった女たちの夢をみる。なにの記憶も何の証拠もない現実の世界の中へ、夢の映像をもち込み、そこに現われた女たちを求めてその追跡に命を燃していく。日常生活は虚しくしぼんで、ほとんど精神病に近い、この反転した世界が何故リアリティをもって読者に迫ってくるのであろうか。

たか子は、魂の冒険を標ぼうするアンドレ・ブルトンのシュルリアリズムから出発した。その小説作法は「無意識を掘る行為」だけであるといってもいい。勿論、精神科医でもなく、自閉症的に育ったたか子の凝視する場所は、女である「自分という個」である。自己の外へ向うのではなく内面へむかう。

内へ内へと掘ることによって、たか子という理知的な女ではなく女一般としての共通項へいきつき、ついには人間の生死の一切が成立しているような始原的生命に立会うことができるのだという。

この逆説を地でいくために、生来の内向性に加えて、人工的に「私の精神病院」までも作らせ、いよいよ外界を拒否して壮絶といってもいい態度で内面を掘っていく。夢か現かという混沌ではなく、無意識世界でみている夢が意識的存在で、日常性はみせかけの作りものにしかすぎないという明晰な反世界の認識のもとで、書くことだけが行為として残る。

その場所で、たか子は何であったのか。まず根の女としての自覚がある。ある老婆の声が聞える。「掬うても掬うても、ほら、こんな無尽蔵にあるわいな、お前さんの腹からでた女につたわっていく、……つたわっていくのは業ばかり、ほら……母性愛なんぞどこにある、男のつくった幻じゃな、ほらほら、あるわ、なんでこんなもんがあるんじゃろな。」(「相似形」)。女が沢山の属性をかなぐりすて、いやでもその本質に目覚めたとき現われ

でてくるのは、母性という社会的な安全性では決してなく、魔性という手に負えない危険性であるという。魔性には、殺意があり、どぎつい倒錯がつきまとう。

自分の内面の魔性の声に徹底してかずらうというのは、恐ろしいばかりでなく、一つの実験的行為であると思う。ある目的のためにモルモットとして己を解剖できるというのであれば、たとえ、自分の目というものを最後まで信じることができたとしても、すぐれて宗教的なことではなかろうか。少年愛があり、背徳があり、自殺幇助があり、悪というものが、鋭くその本質的なものを露呈すればするほど、不思議とたか子は殉教者めいて見えてくる。

昭和五〇年八月五日、たか子はカトリックの洗礼を受ける。「（洗礼を受けても）ふつうの人間なわけです。そしてやはり、人間性をまっとうしたい。悪いこともしたい。悪いことをしてしまってもいい、そういう自分の傾きも含めて、自分の全人間性を肯定しているわけです」、そういうとき、たか子にとって神に出会うというのは、自分の内部の空に顔を向けるということであった。

その後も、デカダンスで、異端そのものともみえる『華やぐ日』、『誘惑者』、『人形愛』などの作品群を書き続けている。ところが、昭和五二年の『天の湖』を境に徐々に宗教的主題を取り上げるようになり、昭和五五年九月、突如、『怪しみ』に収録された短編を残したまま修道女の生活を求めて、たか子はパリに消えてしまう。

『怪しみ』は、意識の周辺に浮遊する生と死とを抱えもつような、かすかな怪しい感情ばかりすくいとったもので、かつての精神分析的で、大ぎょうで、化けものめいた人間の姿はかげをひそめ、静かに死に隣りする生が神秘そのものとして伝わってくる名品であるが、ふとここで、たか子の作家的生命が神の中に吸いとられて消えてしまうのではないかという危惧が感じられた。

私はいま、二年間の修道女にちかい生活の後に生まれた『装いせよ、わが魂を』を読み、かつての虚構を解説めいて喧伝してきたたか子には思いもよらず、ここに収斂するに至った自伝的な作家の素顔をみるのである。

タイトルは、バッハのコラールから取られたもので、「装いとは、神との合一のための純白の衣裳のことであり、つまり、一切の飾りを捨てた全裸ということ」だという。小説は孤独な女が、結婚生活も、恋人も職業すら捨ててしまって、ただひとり異国のパリに自分の場所をさがす、ただそれだけの物語でありながら、プロヴィダンス（神意）というものが主題になっているため、神の暗号をなぞるほとんど祈りといってもいいほどの研ぎすまされたペン先きが、凝縮された裏側の世界を摘出していくのである。

「何かが自分をそちらへそちらへと運んでいる気がする。それを見うしなわないでさえいれば生きていけると思われるもの」、それが見えかくれする。あらゆる表象の中の暗号から、それを読みとるための主人公の放浪はパリの街中にあってもやはり内へ内へと向う。かつて、「生きていると、誰が仕掛けたのでもない罠のようなものに出会うことがある。」（昭和五〇年、「疑惑」）といぶかり怪しんだ、その予感の実現こそがたか子の歩みであった。それは性的で予感にみちた感覚的世界の先行から、宗教的世界へ変容していく過程でもあった。

たか子というひとりの女が、小説家という特権を逆手にとって可能にした実験であり、いまはもう神秘の深みで、その装置すら見定めがたい。この垂直の祈りの中で次にどのような文学が生まれてくるのか、恐れにもにた気分で期待されるのである。

傀儡子目代の話

山崎文学会　荒木俊介

昔、平安頃、小野五友と云う太政官の外記がいた。太政官外記と云えば、天皇の詔勅文をたゞしたり、奏上文を作製したり、或は、太政官らの日程や、宮廷の儀式を掌握する重要な官職である。

彼は見かけは極くありふれた役人なのだが、性格は思慮深く、人の心情にもよく通じた、さが優れた人物だった。

或る年の始め、彼の人生に於いて、思いもかけぬ幸運が訪れた。

それは二月の恒例の春の除目に、永年の外記の労と、その順位によって、伊豆守として、受領の任命を受けたのである。

春の除目と云えば、地方官を任命する儀式のことで、受領と云えば、一国の行政の長官のことである。名誉この上もない事だが、それにも増して魅力のあるのは、その収入の莫大なことだった。当時の貴族の一人、中原師遠の「珠鯨記」によると、彼の父が土佐守になった時、毎年、米三万石、絹織物三十万疋、油百石、糒三百石、白布三千端、その他数えきれない程の収入があったとしるされている。その頃の東大寺の収入が米にして、一万石に満たなかったと云うから、如何に受領の収入が莫大であったかがわかる。

だから、彼等は平素から申文と云うものをそれ〴〵につてを求めて、天皇に奏上して、所謂、就職運動をしておくのである。

清少納言が、枕草子で「すさまじきもの」の一つに、除目に漏れた貴族一家の落胆振りをあげているのも、うなづける話である。

さて、五友は天皇、太政官、或は友人、知己らに出発の挨拶をすませた後、陰陽道によって吉日を選ぶと、一族郎党を引きつれて、都を後にした。治安の不備な当時のことなので、この旅が又、大変だった。武力のすぐれた者二、三人を絶えず先行させて、その日〳〵の宿営の準備をさせるのだが、たま〳〵宿舎のない處では野宿もしなければならなかった。

二十日余りの旅の後、彼等はやっと伊豆の国に入った。落着三日厨と云う三日続きの顔合せの宴会もすませ、前任受領との間で、官倉の諸物資や、諸帳簿の引き継ぎを終えた五友が、先づ第一にしなければならないことは、土地の事情にくわしい公文目代を任命することだった。

公文目代とは、受領の腹心として働く代官で、国廳では受領につぐ最も重要な官職なのである。

それ故、その任命に当っては貴賤を問わず、有能の者を選ぶことになっていた。受領によっては自分の郎党や、在京官人の中から選んで連れて行く場合もあるのだが、五友は国の事情を尊重すると云うことで、国内から広く、しかるべき人物を求めた。

数日をへず、或る郡司から

「才能もすぐれ、物事もよくわきまえ、書もたつ者がおりまする。」

との知らせを受けた。

そこで、五友は使者をたてゝ、その男を迎えにやらせた。程なく使いの者が、くだんの男をつれて帰って来たので、朝堂院の一間で引見した。

見たところ、年の頃は五十がらみで、大きく肥っており、身体を包んだ鄙びた衣服は窮屈そうで、粗末なものだった。

しかし、容貌はと見ると、如何にも宿徳げな顔立ちで、神妙にかまえた相は、うかつには口もきけないと云う目代型にぴったりだった。

五友は心の中に思った。

「この男、心の中はいざ知らず、一応外見は目代型にかなっている」と。

そこで、彼は書の方はどうかと、筆と紙をもたせて見ると、立派な書風とまでは云えないが、目代手の程のことは充分だった。次いで、勘定の方はどうかと、官庫の物資の出入、交易、或は金銭の出納など、複雑な計算をさせて見た。すると、彼は算木（当時の計算道具）をとり出して、いとも鮮かに勘定書を仕上げてしまった。

彼の容貌と云い、書と云い、今また、この勘定方と云い、一応、五友の心にかなったので、この男を公文目代に任じて、彼の傍において、万事につけて、諮りながら、政務を司って行った。

と云って、決して、心まで彼にゆるしたのではなかった。たとえ、郡司の推薦

だと云っても、五友にとっては全く見ず知らずの国人である。その上、この郡司と云うのが、受領にとっては、厄介な存在なのである。郡司に限らず、郷司、領主と云った豪族から、小さな名主に至るまで永年にわたる中央官吏の苛酷な徴税によって苦しめられていた彼等は表面上はいざ知らず、裏面では狡猾な口実を設けて、貢物の提供を拒み、巧みに生活の自己防衛を考えていたのである。

だから、受領の代官である公文目代は余程、しっかりしていないと、彼等の賂いによって、たぶらかされたり、或は又、目代自身が自分の地位を利用して、私腹を肥すと云った様なことがしば〳〵起るのである。

五友はひそかにこの目代の仕事には気を配っていた。だが彼は万事にぬかりなかった。そこで五友は彼に知行の一部をまかせることにした。知行をまかされると、余禄にあづかることは思いのまゝである。しかし、彼の生活は一向に変らなかった。依然として、身なりは五友が始めて会った頃と少しも変っていない。

そのため、何時しか彼の名は近隣の国々にまで「いみじく、賢しこき者」として知られる様になった。

しかし、この事は当然、国廳の上席官人らには心よく思われなかった。殊に彼は身分の低い里人の出である。なかでも名門の出である検非違使所の別当の風当りはきつかった。これには五友も少なからず心を悩ませた。

二、三年が過ぎた。伊豆の春は早い。

二月の或る日のこと。

国廳の表門の傍らにある梅の古木が早くも綻びかけていた。

未の刻過ぎである。五友は国廳の机に向っていた。と急に、表門の方から、がや〳〵と男女の入り乱れた声が聞えて来た。どうやら、検非違使所の別当の声も交じっている様である。

五友は何事が起ったのかと、傍の書生に目をやった。書生もいぶかしげに、五友の方を見返した。

「如何致した、あの騒ぎは。その方、行って見て参れ。」

「はっ。」

書生は立ち上ると、外に出て行ったが、しばらくして帰って来ると

「守、申し上げます。唯今、南表の四足門の前に、傀儡子の一団が参って、出納所の司殿の制止も聞かず、館に上って芸を見させよと騒いでおりまする。ところが、丁度、その場に居合せた検非違使所の別当殿が『構わぬ、入れ』と云われて、出納所の司殿と争われ、騒ぎは一層大きくなっておりまする。」

と、おろ〳〵しながら報告した。

五友は心の中で、又かと苦笑した。検非違使所の別当は歯に衣をきせぬ性で、ずけ〳〵と物を云うし、出納所の老司はこの国廳での最古参を以って自認している堅苦しい老人である。両者とも、なか〳〵後に引かない性だから、何時も、口争いが絶えないのである。それにしても、出納所の老司がこの傀儡子の一団を拒むのは、うなづけるのだが、検非違使所の別当が、「入れよ」と云うのは解し兼ねた。

傀儡子とは、芸や媚を賣る男女の旅芸人のことで、流浪の下層民である。

春の陽光に残雪が解け始める頃になると、よくこの傀儡子の一団が、里々を訪れる光景が見られた。

傀儡子と聞いて、ふと、五友は春の来訪を身近に感ずると共に、馴れぬ地方国衛の生活に追れて、しばらく忘れていた都のことを思い出した。

四季折々の社の祭の日などに、各地から集る傀儡子、猿楽師、琵琶法師、田原法師と云った吟遊の雑芸者達や、その間を浮き〳〵と行き交う見物の都人達で賑う大路の光景や、「今様」の歌を好まれた後白河院が、傀儡子の老女「目井」や、その養女「乙前」らを院に呼んで、習っておられたこと、又、それに飽かれた時、彼女等に命じて、踊りを踊らされたこと、五友もその席にしば〳〵招かれて「今様」の歌を習ったことや、彼女等の踊りの優雅な手さばきに魅了されたことなどを思い浮べた。

それに比べると、何んと地方の生活の単調なことか、彼は急に異郷のわびしさを感じた。

五友は書生に向って云った。

「行って出納所の司に伝えよ。構わぬから傀儡子達を公文所の広間に通せと。そして皆の者も手を休めて、見物せよとふれて廻れ。」

「はっ？」

と一瞬、書生は五友の顔を確める様に見てから

「では、その様にとり計いまする。」

と云って、出て行った。

やがて、不機嫌相な老司を先頭にこの傀儡子の男女の一団が、どや〳〵と広間に上って来た。彼等は早速準備を整えると、笛や太鼓を賑やかに囃しながら、調子に合せて踊り始めた。五友はその囃しを聞いているうちに、何んとなく浮き浮きとし始めた。机に向っている他の官人や、書生達も始めの中は仕事をしながら見ていたが、次第に手を止めて見物しかけた。

ところが、こゝに一人だけ、わざと見ぬ振りをしているかの様に仕事を続けている男がいた。それは公文目代だった。彼は相変らず、書記の書いた下文（命令書）に目を通して、印を押す仕事を続け

ていた。五友はひそかに、彼はこの様な事には、能吏にあり勝ちなように、余り興味がない方なのであろうと、気にもとめなかったが、踊りが愈々佳境に入りかけた頃、笛、太鼓に交って、木で拍子をとる様な音が目代の方から聞えて聞るのに気がついた。何気なく目代の方に目をやると、いつの間にか彼は今迄下文に押していた印を踊りの拍子に合せて、トトン、トン、トンと押しているのである。どうやら、いつとはなく彼等の踊りに誘いこまれて浮き〳〵した気分になりかけている様だった。五友はそれを見て、目代の気持が分る様に思えた。

公文所の南廂の前は、いつのまに集まったのか、館の雑仕や厨女達が折り重る様にして賑やかげに見物していた。

ところが、先程まで拍子をとり〳〵印を押していた目代が次は豊かに肥えた肩を三度拍子に振りながら、印を押し〳〵傀儡子らの歌に合せて唄い始めたのである。

そして、そのうちに堪らぬ様になったのか、

「昔のことの忘れ難く。」

と、すっくと、立ちあがると、彼等の中に交わって踊り始めた。

すると、傀儡女達もそれに合せて笛や太鼓の調子を一段と上げて囃し立て始めた。

あれよ〳〵と云う間の出来事で、そこには、いつもの目代型と云った表情は消えて、生々とした一人の傀儡子の姿があった。

五友はただ、呆れた様に忘然とその光景を見ていた。彼の斜め前にいる出納所の老司はと見ると、にがり切った表情で睨んでいるし、その傍らでは、検非違使所の別当が冷やかに、事のなり行きを眺めていた。

又、その他の官人達は戸迷いの様な表情の者や、笑い興じる者など様々で、南廂の前に集った雑仕や厨女達は、手をたたいて、やんやと囃すものやら、の、しる様に哄笑する者など、平素が宿徳げで、うっかり口もきけないと云った目代だけに、この広間は奇妙な雰囲気の光景を呈していた。

しかし、この光景も長くは続かなかった。周囲の異様なざわめきで、目代は皆の目が一様に自分に集っているのに気がついたのである。

その途端、彼は身づくろいもそこ〳〵に手に持っていた印を投げ捨てると、人垣の中を、まぎれる様に館を去って行った。

ほんの僅かの間の出来事だった。後にのこった人々は呆然として、彼を見送った。

その後の広間には、検非違使所の別当のあたり憚らぬ哄笑が、カラ〳〵と響いた。

やがて、騒ぎはおさまり、傀儡子達の一団が去って行った。官人達はそれ〴〵退廳し、館内は再び静けさが返っていた。

日は既に傾き、梅の古木が内庭に長い影を引いて、蔀の内は薄暗かった。

「守、ちと耳に入れたき儀が。」

と云って、出納所の老司が五友の部屋に外から声をかけた。

「おっ、司か、構わぬ、入れ。」

五友はあの騒ぎの後、傀儡子らを手厚く、ねぎらって送り出してから、こまったことになったと自室に入って案じていた所だった。

彼は近々と五友の前に寄ると、声を落して

「困ったことになりました。」

と如何にも公文目代のことが案じられるらしく

「かの傀儡子どもが館を去る時、あの公文目代殿は昔、若かりし時、我々と同じ仲間でありましたところ、それが書などを習い、文などを読んで、今ではこの国の目代として、その名声も高いと聞くに及び、若しや昔の心ばえ失せずもやと、遙る〳〵尋ね参ったと申しておりました。」

「……。」

五友は、やはり、そうであったかと、心の中で呟いたが、言葉にはならなかった。

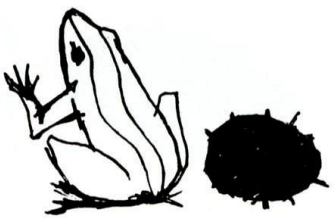
「それをあの別当めが、公文目代はもと傀儡子なりと、館中を吹聴いたしておりました。これは若しや……。」

と云いかけたのを五友はとゞめて

「もうよい、打ちやっておけ、たとえ、別当がたくらみとしても彼等にはかゝわりのないこと。それにしても、あの者達、昔を忘れず訪れて来るとは、人は身分の低いもの程、情が厚いと聞きしが全くその通りよの。」

「まこと世の中、そうしたもの、様で。」

五友は老司と語らいながら、心の中に、



公文目代と云う立場を忘れて、傀儡子らと一諸になって踊っている目代の姿を思い浮べていた。

それは如何にも、ユーモラスで微笑ましい光景だった。すると、かつて能更であるが故に彼に対して覚えたこともない様な親しさが湧いて来るのを感じた。それはやがて、永い間彼に対して無意識の中に求めていたものを今始めて見出したと云う喜びに変って行った。

彼は急に公文目代と膝を交えて話をしたいと云う衝動にかられた。

彼は老司に命じた。

「そこもと、直ちに馬の用意を致させよ。」

「はっ。」

やがて、御厩(みうまや)の下僕の用意した馬にまたがると、彼は公文目代の住いに向って、夕暮れの迫る館を後にした。

その翌日。

国廳には、いつもの様に出仕して、政務に励む目代の生々とした姿があった。

それ以後、館うちと云わず、里人と云わず、この目代のことを傀儡子目代と呼ぶ様になった。唯、この話で残念なのは、この目代の本名が伝わってないことである。それは彼がただの里人であった為かもしれない。

〈第4回秋の芸能祭〉

事務局雑報

山崎町文化連盟事務局長
福山清一

機関誌「やまさき文化」第二号が各位のご協力によって早くも発刊されることは誠にご同慶に耐えません。

本誌を通じて、構成各団体の考え方、運営等に理解を深め協力、支援の輪が力強く拡がって行くことを希望いたしております。

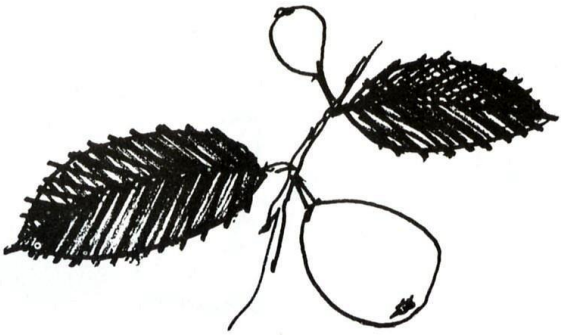
昨年五月に前会長庄静夫先生がご病気にて辞任をされましたので、その後任として県並びに山崎商工会長の要職にあられ公私共にご多忙の壺阪壽氏にご就任をお願いいたしましたところ、心よくご承諾をいただき、今までと異なった視野と感覚をもって運営、指導をしていただいております。

文化講演会等の講師も山崎町出身者にて各界に活躍されている方々にお願いする方針で計画をすすめております。

昭和五十七年に各構成団体にて計画されました各行事も、それぞれの担当責任者のご尽力にてすべてが終了し、その真価が充分発揮され山崎町文化向上発展の責務を果してくださったものと深く敬意を表し、ご労苦に感謝いたします。

合唱連盟、児童合唱団による秋の音楽祭、古典的なものを主とした秋の芸能祭も多くの観客を集めて盛大に挙行され、特に郷土芸能保存会に中野・青木部落の獅子舞が参加されたことは力強く思っております。

昭和五十七年に連盟としての最大行事である山崎闇斎没後三百年記念事業の闇斎神社玉垣建立も、山崎文化連盟、山崎郷土研究会、山崎町西鹿沢各有志のご協力のお陰にて見事に完成し、十二月九日に完成式典を行いました。玉垣完成に伴い、神社の壮厳化により一般の方々の山崎闇斎先生に対する認識も一層深まるものと期待いたすとともに、ご協力を賜わりました皆様に謹んで厚くお礼を申し上げます。



短歌

藤村省三

〝兵庫県民短歌大会催される〟

57年度県民短歌大会が11月23日、西兵庫信用金庫本店大会議室で開催された。出詠八一〇首、出席二七〇名、地方の大会としてはかつてない盛況であった。

大会は正午、県歌人クラブ代表米口実氏の開会の辞に始まり、主催者挨拶に続いて谷口町長の祝辞があり、本年度新人賞発表のあと、出席者の詠草について、一六名の評者から懇切な講評が行われた。

会は午後五時、地元代表藤村省三の閉会の辞をもって終ったが、出席者一同は深い感銘を抱いて帰途についた。入賞入選歌中、関係分を抄出する。

ライバルと意識せし日も遙かにて供華に埋もるる君と対き合ふ　志水　種子

夫の戦死せしより行商を続けたる友の荷このごろ小さくなりぬ　芦谷ふさ子

わが夫のものならずとう証なし今映る海底に錆びし軍刀　西下　秋枝

言ひ放ちたき言葉いくつが埋もるる胸を巻尺に計られてゐき　新田　弘美

衰へし視力に低くつけし灯が顱頂に暑しミシン踏みつぐ　栗山　節子

ひそかなる奢りと買ひし新刊書三冊がバッグに持ち重りする　菊原たか子

〝西播県民短歌祭入賞入選作品〟

受験期の子のセーターを編む真昼屋根より雪の落つる音する　栗山とし子

海よりの風吹きやまぬ一日を高き足場にありて塗装す　北　隆治

冬木立静もる森の巣箱一つ春待つ如く穴の明るし　冨和かず子

店売りの今日のあがりを喜びて厨に嫁と熱き茶をのむ　青柳　良

〝兵庫県春季短歌祭入選作品〟

チェンソーに伐らるる櫟支へもつ手をぴしぴしと鋸屑が打つ　栗山　節子

雪とけし山の櫟を明日伐ると夫は夜なべにのこぎりを研ぐ　栗山とし子

渡るべき季を禽舎に飼はれゐて鴨の類ひの或ひは番ふ　稲村　幸子

帰り来て小暗き部屋に安らぎを拾ふ思ひに灯を点したり　冨和かず子

結婚式より帰りし家に縁おそき吾子がひとりの夕餉してをり　野中かつ子

遅咲きの紅梅わづか咲き初むと告げつつ姑の髪小さく結ふ　森本万千子

背かれし心みだるる夜の更けを屋根すべる雪音たてて落つ　北　隆治

降る雪を硝子戸越しに見つつをり吾に相聞の歌一首なく　北川　智恵

〝稲村幸子歌集「苧環集」でる〟

「苧環集」には、昭和35年から56年までの作品の中から厳選された五三〇首が収められている。永年の洗練された表現力と衰えを知らない豊かな感受性によってどの一首も、厳しさの中に深い情感を湛えたものとなっている。殊に、夫や子を詠んだ作品は切々として心に響く。

娘の帰り待ちつつひとり病む昼を腹に当てたる蒟蒻にほふ

縋るものなき悲しみに在り経つつ光る針拾ふ昏るる畳に

地踏む日再びありや膝の上に拭くに柔らかき夫の蹠

リュウマチの脚に勤めし証とも夫が遺しし片減りの靴

蕗の薹朝餉の汁に浮かべつつ生き残るとふことの身に沁む

待つ夫の亡き家近く帰りきて持てる土産がにはかに重し

次の間に娘が咳きしより小夜中の思ひはながく娘にかかづらふ

何のわが心弾みぞ嫁がせて孤りとならむ日の間近きに

嫁がせてひとりの炊ぎものうきに一合の米が音たてて噴く

肌寒き梅雨の昼間の嘘三つ風邪ひきしやと問ふ者もなし

〝山崎歌話会例会詠草抄〟

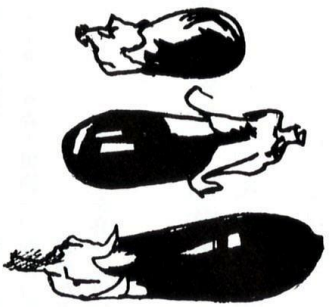
機械音とまりて恐怖落ちつけば歯医者の窓にうつる冬空　大井　秀子

餅につきて外れし義歯を嵌むるときわがものならぬ寂しき音す　松本　富治

夜をこめて空渡りゆく候鳥をみちびく星かカシオペア冴ゆ　松本寿賀子

雨露に松葉の先の光りつつ淡々として雀らの愛　北川　智恵

つづまりは老が詫ぶればすむことか節
分の夜のあかがり痛む　稲村　幸子
角立たむ言葉はのみぬ灯にてりて壺に
あふるる紫陽花の藍　藤村ふくよ
四世帯に一つは老人家族とふニュース
を夫と危惧もちて聞く　菊原たか子
とんどの火囲める子らにたちまじり老
斑しるきわが手をかざす　藤原すみゑ
人の心はかりかねをり掃き降る階より
立ちし微塵浴びつつ　山崎きよ子
握り来し百円玉を先づ見せて菓子選る
幼けふは来ざりき　井口　隆子
牛好きの母がベッドに臥す今も時をり
夢に牛飼ふといふ　北　隆治
夕光の移ろひ見する田の面に子らの残
しし紙の飛行機　青柳りょう
除草剤に堪へて残りし澤瀉のなよなよ
と青田の中の一株　森本万千子
年越しの蕎麦やうやくに納め終へ暗き
非常燈の階降りゆく　安東はつ子
風邪に寝て幾日を癒えぬわが庭に今朝
うぐひすが来りて鳴きぬ　大前　静枝
真実は伝はり難し陽の差せる庭に重た
き雪掃きてゐる　新田　弘美
見さかひなく言ひて疎まるるわが性か
話は尾鰭つきて伝はる　太田たき子
あと幾たび賀状書き得る吾ならむ親し
き友のまた一人逝く　赤松　年重
年毎によろこび淡く衰へて長き手紙を
書くこともなし　藤村　省三



〃短歌会案内〃

山崎町には次の短歌会があって、いずれも初心者、経験者を問わず短歌愛好者の加入を歓迎している。

・山崎歌話会
結社にとらわれない歌人の研修と親睦の場である。
事務局　本町一一九　松本富治方

・新樹短歌会
指　導　藤村省三
事務局　須賀沢六八　山本千代方

・老人大学かしわの短歌会
指　導　稲村幸子
事務局　西鹿沢　かしわの学園内

中野の獅子舞について

去る十一月二十三日に開催された、山崎町秋の芸能祭に郷土芸能の代表として披露された、蔦沢中野地区の獅子舞について紹介をいたします。

この獅子舞は都多小学校の北隣に鎮座される桓武伊和神社に江戸時代から奉納を続けられている伝統あるものでありますが、氏子の内で中野地区に当屋が廻って来た年にのみ奉納されるので毎年まわすものではありません。桓武伊和神社の祭神である桓武天皇は狩猟を好まれ、この地へも来遊されたという言い伝えもあり、その神霊を慰めるため、この獅子舞が奉納される様になったといわれています。

ここの獅子舞は伊勢獅子舞の流れをくむが、六種の舞があり、「屋島」、「シャンギリ」、「おたやん」、「剣」、「ほらかえし」、「舞台かゝり」であり、その内「屋島」、「シャンギリ」、「おたやん」の三番が芸能祭で発表されましたが、夫々の舞には意味合があり、例えば「屋島」は獅子が蝶にたわむれるのを型どり、三名の踊子のもつ鈴をつけた笹にあやつられ舞います。「おたやん」は神代の昔、天の岩戸の前で舞いを舞われた天ノウヅメノ命の姿を型どり「まり」をあやつるおたやんが獅子とたわむれる様を表現します。「シャンギリ」というのは獅子が怒りくるう姿を表現しているもので、獅子がアクロバット的に舞うこゝの獅子舞のハイライトであります。御承知のとおり獅子舞は大勢の人々の協力がなくては継承保存してゆく事が困難であるが、中野の獅子舞については熱意ある古老の指導と、永い伝統のあるものを後の世に残そうとする一生懸命な若い人達に敬意をはらい、この風格ある獅子舞がいつまでも保存される事を望みます。

〔山崎町郷土芸能保存会事務局〕

第二回 山崎町俳句大会

山崎町俳句協会代表
和田　疎人

山崎町文化連盟文芸部の一部門である俳句協会では、昨年に引続き本年も宍粟郡内俳句同好者を対象に第二回俳句大会を去る十一月二十四日、八幡神社楠風閣に於て開催した。

出句数一六〇句余、四人の選者が無記名の句稿より各自が特選三句と入選二十句を選び次の通り決定した。尚選者は原田魚梯（相生）、中野秋藻（姫路）、岩井宍城（山崎）、和田疎人（山崎）で「若葉」、「九年母」等に依る俳人協会員、推薦作家、同人等で各々優秀作品の選評を試みた。

町長賞　原田小次郎・山崎
人界に降り来る僧の霧まとい

文化連盟会長賞　中野治水・山崎
禰宜少し神酒に機嫌や秋祭

議会議長賞　青柳有紀・山崎
豊穣の野へ出づ琥珀色の月

神戸新聞社賞　鳥羽夕摩・千種
老いてなほ手力男たり秋祭

特選賞　原田有里・山崎
蕾まだ硬き衣や菊人形

〃　村元優子・青嶺
呼び合ふて霧の中ゆく木挽衆

〃　福田泊水・山崎
霧深し声かけ合ふて築を守る

〃　田中春園・山崎
霧しづく保存樹包む菰朽ちて

〃　小倉悠丘・山崎
み佛のかんばせ暗し秋時雨

〃　高野しづ・山崎
木の実落つ興亡の墓苔むして

入選　警笛の音さまざまに朝の霧（横尾恵風）神殿を巫女の走りて秋祭（秋久光子）院庭の石の静もり薄紅葉（田中恵）霧の灯に帰るふた夜の旅果て、（小紫いく）車椅子の児も法被着て秋祭（芦田八重）砂丘行く音のかそけさ銀河澄む（小倉悠丘）古琴のゆたんはづしぬ十三夜（山口美根女）朝鴫に霧流れゆく藪畳（原田紫明）亡き姑と漬けし桶鮨秋祭（小畑柏人）朝霧の森に拾ひぬ鷹の羽（原田駆雲女）孫負うて子供御輿について行く（宗平素栄）霧の中ジョギングの彼手で合図（石野光栄）

佳作　三十五句

尚優秀作十句に朝日新聞記念メダル及び賞が朝日の販売店より贈られた。

〃昭和五十七年の回顧〃

4・21　山脈句会、清荒神に吟行。冨同鉄斎展を鑑賞。

8・18　文化連盟前監事・山脈句会幹事・松原磐氏（磐山）氏逝去。

10・19　文化連盟理事・青嶺句会幹事・猪尾健一氏（月峰）氏逝去。

11・24　第二回山崎町俳句大会を楠風閣に於て開催。一六〇句投詠あり。

12・15　山脈句会、姫路市広峰神社方面に吟行。

〃山崎俳句協会雑詠〃

〈青嶺集〉

虫を聞く亡母の座椅子に凭れいて　芦田八重
慰めの叱責のごと虫鳴けり
風花やひたすらに炭負ひ卸す　岩井宍城
虚子在りし小諸の町の秋深む
嵯峨野来て添水の響き春寒き　田中　恵
地鎮祭霰転げて潔めゆく
拷問のごと積み重ね莖の石　中野秋藻
繰り返す電光ニュース街時雨
時雨る、やがやゝあがる野天風呂　原田魚梯
裝へど孔雀も羽抜鳥のうち
地虫出てしゃにむに穴を遠ざかる　原田小次郎
秋深し土偶は耳を持たぬもの
湯ざめして濡れ髪肩に重くして　原田駆雲女
下宿屋の大擂鉢やとろ、汁
大池に神事高まり神輿浸く　原田有里
榧かきににぎわう今日の冬の山
時雨にもさほど逢はずに嵯峨巡る　福田泊水
春昼の花時計今影もなし
穴を出て地虫この世の色となる　三幡林風
穴を出し蟻に箒目低からず
大試験終えたる顔の戻り来し　村元優子
子の部屋の灯に安堵大試験
句座終えて出でし夜空に冬銀河　山中恒女
背を割りて今生れし蟬うすみどり
柚子味噌に残りの酒を惜しみつ、　高野南嶺
秋時雨山門に佇ち寺誌を読む

畦行けば焼野の匂ひたゞよいて　下村きみ子
木犀の香りて静かなる野点　佐々木朱鶴
寂しさが人遠くしぬ黄水仙　和田疎人
日記買ひ女嗜むこと多し
毒舌を吐く籐椅子を軋ませて
とろ、汁啜り開拓談はずむ

〈山脈集〉

袴ひだた、みしま、の土筆出づ　淡路澄女
武具つけし人形どこか幼くて
踏切小屋夾竹桃の中にあり　石野みつえ
夾竹桃尽くる処に砂丘延ぶ
四葩なる花寄り寄りて大毬に　伊藤紫霞
走り根にまろびし霰溜り居り
新らしき杓の匂いや初詣　梅田梅風
いさ、かの余生の奢り梅に酌む
残雪を踏みあらしつ、追儺鬼　大谷秋葉
強東風に濠の糸柳さからわず
浚ひたる溝突っ走る田植水　長田久也
掌の中の種かたよらず落す指
小布入る葛籠にひそときら、虫　尾崎すゞ子
初電話一人居し子の声を待つ
今朝生みし寒卵とて隣より　岸本正人
出勤のバスは来らず霰降る
た、なはる嶺々現れ初めて霧晴る、　高野しづ
耀を待つトロ箱霰打つま、に
桜貝旅の記憶の砂こぼす　小紫いく女
雪の中鶴の遠啼き聞く旅愁
微熱出て今日も点滴鰯雲　小畑柏人
夾竹桃息つぐさまや喜雨到る
榊一枝もて山開き祓はる、　田中春園
ハイジャック案じ帰省の孫を待つ
事故車埋めつくすがに雪降れり　谷林初枝
権ヱ門米七斗と紙魚の帳（年貢米帳）
浜豌豆嶋の娘ら混布干す　取越芙蓉
露ふくむ青鬼灯はまだかたく
寝たきりの姑に窓明け遠ざくら　戸田五山
春愁や素直になれぬ老わびし
麩に祖母が作りし紙の匙　中野治水
犬小屋のことりともせず夜寒し
稗をとる農婦の背に見ゆる老
鶯の声はるかなる種を蒔く　前田いえ
強東風の竹藪白くなびかせて
帰省の子話はつきず夜は更けて　宗平素栄
茶を点じ夫と二人の冬籠　森谷愛子
留守らしき背戸に笹鳴しきりなる
歳晩の花舗昼灯し華やかに　山野源子
師の句碑を訪ひて落葉を拾ひもし
掌にとれば命の温み寒玉子　安井方円
帰省子に父の浴衣のよく似合う
武者人形いざ出陣の構なり　山口美根女
朝雲に炎暑の兆始まれり
背の子に語りかけつ、武具飾る　山本きく女
熟れ頃が鬼灯の朱の透けて見ゆ
セーター編む己が余生を思いつ、　山下そう
大地凍て蹌踉と翔つ寒鴉
病棟の日課変らず春の宵　横尾恵風
春寒く電話の母の咳激し
組める掌に霰を溜めて跌座露佛　和田疎人
すぐ信ず人柄が好き四月馬鹿

山崎町の史跡

前田　連

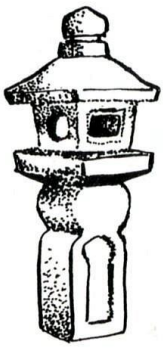
二千年以上の歴史をもつ我が山崎町には、色々の文化の跡がかくれている。特に城下町であった山崎に多い。史跡部が誕生してまだ十年にならないが、それでも三十ヶ所に近く、以下これを列記するが散策の栞にしていただきたい。

A　既定の史跡

一　山崎城跡　本鹿沢
二　山崎闇斎先生出身地　西鹿沢
三　（闇斎先生産湯の井戸）　〃
四　山崎藩主本多侯屋敷跡　本鹿沢
五　旧因幡街道　山田
六　揖保川高瀬舟起点舟着場跡　今宿
七　船元の渡し場跡　船元
八　山崎城　内堀の跡　本鹿沢
九　山崎城　埋御門跡　〃
一〇　山崎城　中堀の跡　中鹿沢
一一　比地・金谷條里制の遺構　金谷
一二　聖山城跡　出石
一三　山崎城中門跡　本町
一四　宇原群集墳（第一号）　宇原
一五　長水城五十波構の跡　五十波
一六　山崎城　外堀の跡　本鹿沢
一七　須賀代官屋敷跡　出石
一八　長水城跡　宇野
一九　山崎本多藩大庄屋庄氏屋敷　高下
二〇　山崎藩城下　町筋の遺構　山田町
二一　篠の丸城跡　篠の丸下
二二　山崎藩　桜の馬場跡　中鹿沢
二三　山崎藩　御倉屋敷跡　宇原
二四　清水口見付御門跡　山田町
二五　生野義挙　志士最期の地　木の谷
二六　桓武伊和古墳　中野

B　内定している史跡

一　山崎焼窯場跡
二　銅鐸出土地
三　千本屋廃寺跡
四　山崎藩勘定所跡
五　山崎藩築場跡
六　郡役所跡



▽山崎郷土研究会史跡部△

新潮会結成三〇周年を記念して

新潮会副会長　杉元清美

終戦後の荒廃した混乱期を経て人心がようやく落ちつきを取戻しかけた昭和二十七年六月に、山崎町内に居住する明治末期より大正年代に生をうけた者が相集い、お互の友情を深めると共に、文化性を高め、更に会としての団結の力で、心のふれあいを通じ微力乍ら文化活動を展開し、地域社会に文化の灯を点じようと念願して、新潮会が結成され本年で満三〇年が経過致しました。

会としてはこの三〇周年を記念して、去る十一月六日、西兵庫信用金庫六階大会議室に於て谷口町長、尾崎教育長、伊藤文化連盟副会長を来賓としてお招きし、会員及び家族が出席して記念式典と祝賀会を実施致しました。

――三〇周年記念事業

一、山崎町文化会館等建設に当り汁器備品費として金壱百万円を寄贈。

二、取越三郎氏作詞、塚田英夫氏作曲による新潮会讃歌を作成披露。

三、全会員投稿の下に新潮会三〇周年記念誌発刊。

新潮会の現況は、壺阪壽会長以下二十六名で地区的に五組編成として、各組当番長が一年毎に交替就任し各組が毎月の行事も担当して運営している。

現在までの物故会員は四名で次の通り。

富土町　山治木材工場長　岡田　二郎
出水町　山崎町助役　後藤　修二
山田町　とくさや文具　志水　確二
西　町　南門前屋社長　前野　善吉

〝新潮会讃歌〟

(一)
狭霧の城趾　百合白く
いざよう川の　水澄みて
恵みゆたかな　この里に
文化の旗を　かゝげつゝ
足音たかし
新潮会　新潮会

(二)
月上弦の　高楼に
杯かわす　はらからと
夢と希望を　かたりつゝ
平和の社会　築かんと
誓もかたし
新潮会　新潮会

(三)
遙か山脈　雪清く
悠久に流る、　雲白く
流転果てなき　世にありて
三十年団結ゆるぎなく
尚意気たかし
新潮会　新潮会

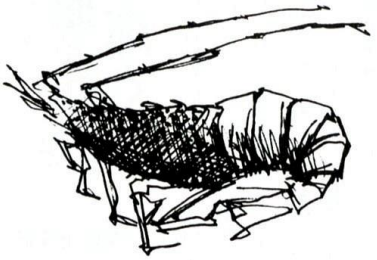
山崎囲碁同好会と大井萬兵衛翁

■囲碁同好会　前野四郎■

昭和二十四年当時の本因坊橋本宇太郎先生がたびたび龍野へ御越しになり、西播磨地区の囲碁がにわかに盛んになりました。山崎囲碁同好会も兵庫県囲碁連盟宍粟支部、関西棋院龍野支部宍粟部会、宍粟囲碁同好会等名称は変りましたが、内容はいつも同じ碁の仲間でありました。その中にあって最年長者であり、最強の打ち手は大井萬兵衛氏でありました。大井さんは昨年満百才を迎えられ内閣総理大臣から賞状と記念品を受けられ誠にお目出たい限りであります。世間では碁を打ってあたまを使えば長生きが出来ると申します。大井さんは今も尚棋力衰えず頭脳明晰で昔の事も正確に憶えて居られます。実に長生きの秘訣は囲碁にありというべきでしょう。

大井さんは注射はきらい、薬もきらい、酒タバコはのまない、食事はパンと牛乳、タマゴ、それに魚少々と野菜といった具合です。毎日散歩をかゝさず、時には薪を割り畑をつくられ、物事にこだわらず何事も苦にしない、不平不満は一つもない、ただ生きがいは囲碁ひとすじで相手があれば何時でも何時間でも打つ、若し相手がなければ新聞雑誌の碁をならべるという生活で誠に私共碁の同好者にとって理想の人、目標の人であり、うらやましい次第であります。又、山崎同好会が日本に誇り得る存在であります。

尚、囲碁同好会の会員の中で碁を打って楽しむというだけでなく、碁を研究して強くなりたいという新しい年代の方が高野圭介氏を中心に関西棋院宍粟支部として発展して参りました。同支部は本年満十周年に当りますので記念行事が計画されて居ります。之については次の機会に担当者にて報告いたします。



山崎闇斎三百年祭
奉賛吟道大会について

山崎詩舞道連盟
会長　小川　登

頌　山崎闇斎先生

覇氣漫漫遍教学（ハキマンマンキョウガクニアマネク）
垂加聖道崇不嶽（スイカノセイドウフガクトタカン）
星霜三百遺風倬（セイソウサンビャクイフウアキラカナリ）
郷党集斉仰大覚（キョウトウヒトシクツドイテダイカクヲアオグ）

去る十月十七日の日曜日、山崎まつりの最終日に、山崎詩舞道連盟は下村記念館に於て、山崎闇斎三百年祭奉賛吟詠大会を盛大に挙行致しました。出演者は山崎町内の賀堂流、摂楠流、紫洲流の各吟士並に冠翔流の扇士等二百余名、来賓として山崎町谷口巌町長、文化連盟壺阪壽会長をお迎えして、祝辞を頂戴致しました。

又、冠翔流家元喜多冠翔先生の琵琶舞黒田節の模範演舞をはじめ、賀堂流近畿総本部より内藤賀峡、金尾賀空両副会長、摂楠流山崎恵摂講師先生外の範吟がありました。中でも遙々広島より久賀賀久苑、山本賀陽洲両先生のご来演を頂いたのですが、両先生は夫々、曽て吟詠日本一の栄誉に輝く、全国吟詠コンクール決勝大会に、中国・四国地区代表として出場された方であるだけに、気品に溢れ、迫力ある素晴らしい吟を披露して頂きました。

大会は午前十時開会、国歌斉唱、会員吟詠第一部、昼食後、会長挨拶、来賓祝辞、会員吟詠第二部、来賓吟詠へと進行、其の間、独吟、合吟、華道吟百十余番、剣扇舞十番を熱演して午后四時終了、閉会後、出演者全員参加の懇親会が催され厳粛の中にも和気満堂の大会でありました。

標記の山崎闇斎先生を頌する、七言絶句、仄起覚韻の詩は、拙い私の作ですが、闇斎先生の御聖徳を讃えながら本大会に於て吟じさせて頂きました。

最後になりましたが、当日ご観賞頂きました皆さまに、厚く〳〵御礼申し上げます。

安田笙さん
サンデー秀句館
琳琳賞に輝く

伊藤親保記

無残やな　秋風永久に　秋のまゝ

毎日新聞連載の「けさひらく言葉」の著者である塚本邦雄先生が選者で、俳壇に新風を吹き込むサンデー毎日の「サンデー秀句館」の最高賞である。又、今年四月八日毎日新聞「新風新顔ひょうごの人物帳」に安田笙さんの琳琳賞の栄誉が紹介され、私は郷土の誇りとしてうれしかった。

確かに芭蕉へのパロディーとは思われるが、決してもじりや風刺ではなく、彼の純情の人生への素朴な体当りの人間性への直観のようである。

逆立ちす　晩秋の血を　量るため
こがらしを　密封したる　醤油壜

以下俳聖芭蕉の句を通して、彼の句作の心の背景を訪ねたい。

塚も動け　我泣声は　秋の風
此道や　行人なしに　秋の暮
むざんやな　甲の下の　きりぎりす

芭蕉の句の底を吹き抜けるものは、秋風であり哀愁であり、北陸路での旅愁かも知れないが、門弟一笑の墓前での抑圧された追善の叫びであり、実盛への追憶は「無残」の老者への抑圧の叫びとなっている。それは芭蕉に取っては、老いゆく寒く淋しい秋風としての人生の旅愁へのくまどりとしての俳聖の絶唱である。

然し彼の純粋素朴な若い鋭い感性は、芭蕉へのパロディーではなく、密着した生活への大胆な体当りの人生への試行の叫びであり、現代社会のエゴや、権力への恣意や、我田ばかりの経済動行に対し、大自然や人間性への帰一の声としての、哲学的リズム的美観さえ感じ、そしてその影には青年らしい虚無感やニヒルの香さえある。

又、彼の琳琳賞への背景にあったといわれる秀作の短歌。

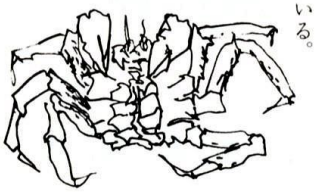
君までを半径として見渡せば
ただ撫子の風の立つ街

彼には常に生きる小宇宙があり、ふる里がある。そして積極的な過去と将来を見つめようとする、繰返すことの出来ない生への繊細な感性と強い意志が秘められている。

大学卒后の東京での二年の会社勤めは、彼の人生観が許さなかったようである。郷土に取っては有得難いリターン組である。私は役場職員にお世話をと考えたが、

出来なくてよかったと思っている。又、私は終戦后永らく子供会を世話した思い出や、愚息の良き先達としての親しさを感じている。教員退職、画廊開店当時、早稲田に入学したと、武者小路実篤の短冊を買われて上京された想い出が消えない。又、我家での息子等の同志の語らいで「ヘミングウェイの死に関する観点」の卒論だが「人間はどんなに努力しても自然死は迎え難い」との彼の話に驚嘆した。俳句、茶道は勿論、若い同志のリーダーとして、少林寺拳法、書道、昔の盆踊りの再興等々、若いが死への対峙を知った、郷土に生きようとする筋の通った青年である。

又、彼は言っている。風雅の道を志す者はその途に野垂死するものだが、軽薄の私の句屑が夢の浮橋の琳々賞を、と云い切る彼は大した若人である。こうした青年の輩出こそが、将来、山崎を文化の町として生まれ変らせる契機となることを、私は確信している。



チャリティー茶会によせて

山崎茶華道協会
谷川　善勝

〝一期一会〟の一期とは人間の一生であり、一会とはただの一度の出会いであることはご存じのとおりであります。

松原泰道氏著〝禅語百選〟に〝そもそも茶の交会は一期一会といいて、たとえばいくたび同じ主客と交会するも今日の会に再びかえらざることを思えば実にわれ一世一度の会なり〟と、井伊直弼は自分に言い聞かせたとあります。

今の社会において人と人との交会が、お互い一期一会を念じ大切にされているでしょうか。物質文明が進めば人間も物理的に処理されるようになって、うるおいのある豊かな人間関係が壊され疎外がはじまる、と或る人が謂っています。

最近〝手づくりの味〟という言葉を耳にします。如何にも希少価値的に使われるこの味は、生活上忘れられてはならない味だと思います。昭和四十四年に発足した山崎茶華道協会は、華道七流派、茶道四流派の会員有志が会長中心に、連帯と協調を基調に茶華道の向上、地域社会の文化の発展に寄与するため、爾来諸々の事業を推進し頑張ってまいりました。

去る十一月二十八日催しましたチャリティー茶会も事業の一環であります。下村記念館を会場として協会員の奉仕と皆様の協力で成果をあげることができました。

会場立札席の一輪の露に光る白玉、茶碗にこもる馥郁たる香り、そして甘酒、善意と奉仕の交会、そこには一期一会の交会があり、手づくりの味は心ゆくまで賞味され、満足感を味わっていただいたことと思います。

最後になりますが、より豊かな文化の町づくりのための拠点として、山崎町に一日も早く文化センター（町民センター）の実現することを念願してやみません。

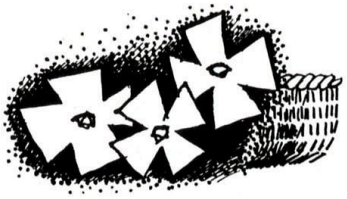
将棋の魅力

《《《　山田栄三　》》》

プロ野球日本シリーズに於て西武ライオンズが三勝すると、新聞の見出しに「西武が王手をかけた」と書きたてる。勝負の世界では、よくこの言葉が使われるが、言わずと知れた将棋用語であります。我山崎将棋同好会は当初、野村与一会長、原田、永井の副会長のもと発足し、対外試合等を行ない乍ら徐々に発展し、続いて三木会長、南部、松井副会長のもとに、いよ〳〵隆盛のきざしが見え、今回の改選にて井口新会長、三宅、山田副会長と、新たに後藤事務局長がたん生した。昨年及び本年、チルドピアで「王将と歩」に多数の児童を集め、また山崎闇斎神社の玉垣にも多数の方の尽力を得まして、前途洋々たるものであります。ご承知の通り将棋はハンディのつけにくい競技であります。将棋の駒は、王将を含めて八種類あり、それぞれの駒が個性的な働きをし、相手の駒を取ったり取られたりすれば、敵が味方になり、味方が敵になったりして、非常に変化に富んだ戦いをして、なか〳〵面白いものです。碁が領地の取りっこならば、将棋は敵の大将を早く撃ちとった方が勝ちといった戦闘的なものです。最近はゴルフが流行していますが、ゴルフや囲碁はかなり力の差が有ってもハンディがつけ易く、同じように競えるので、少々力が劣っていても優勝のチャンスがあり、それなりの愛好者があります。その点将棋は真の強者しか優勝出来ない、というのが魅力であります。さつき祭りでは東播・中播・西播各地よりつわ者が集り、地元山崎町の者が賜杯を守るのに、せい一杯です。真の将棋愛好者によって今後益々山崎町将棋同好会が発展するようがんばりましょう。

山崎の茶華道のあゆみ

北川智恵



山崎茶華道協会が設立されたのは、昭和四十四年一月ですから、丸十三年になります。会員数は約二七〇名、相撲で申せば、幕内以上大関位までが会員ですが、その弟子たち全部を数えますと、郡内切っての大集団であります。

会の主旨は、「会員の連絡協調、及び親睦を図り、茶華道の向上と、地域社会の浄化と、文化の向上発展に寄与する」ことが目的であります。

このため吾々としては、各その師匠のもとで技術と修養に努力する傍、会としては、年四・五回の茶会を催しております。春のさつき祭、秋の文化祭には、茶と華、またさつきマラソンにも出向いて選手達に喜ばれております。今年からはじまった、山崎祭にも参加することができました。昨年は、八幡神社で催された「薪能」にも奉仕いたしました。

チャリティー茶会につきましては、茶会で得た浄財は、山崎町に文化会館が建設されたときの備品購入の一端に　もと、毎年寄附しておりましたが、現在は山崎町福祉協議会に納めております。

このように早くから、この会の会員たちが皆な協力して活動出来るようになったのは、過去における偉大な諸先生方の足跡のたまものであります。

私共を、この道に導き入れ、ご指導くださいました諸先生方を、私の知っている範囲でご紹介いたします。

先づ筆頭のお方は、谷川善勝先生でしょう。先生は山崎高等女学校の茶華道の教師として多くの子女を指導されましたが、男子の方々にも、ご教授なされていました。ご長身でいつも羽織袴の端正なお姿は、古武士を思わせるお方でした。

つづいて、鎌田先生、村本さく先生、志水宗芳先生、小倉宗龍先生でした。

小倉先生は、九十才近くもながらえられ、つい最近まではこの会のリーダーとしてご活躍くださり、又、老人大学初代の先生でもありました。

このほか、明治の晩年ごろには、本多家の家老・武間郡長夫人に私の母らが習ったと聞いたことがあります。

かくして谷川先生、鎌田先生のころは、茶華道の花開いた大正から昭和初期のことでしたから、多くの男子の方々が、この道におられたのでしょう。北先生、三木辰由先生、猪尾金治先由、梶原先生、池田先生等々。戦争がなければ今だにこうした男性の方で先生や、数寄者がつづいていたのではないでしょうか。

利久の頃は、武将や、堺の商人など、ほとんど男子が嗜なんだものです。ですから、戦前のように男性の方々が挙って斯道に親しんでくださるよう願っております。日夜激しいお仕事に忙殺されておられる男性諸氏、「忙中閑」の一刻を、おつくり下さい。

さつきとともに花の文化を高めよう

播磨さつき会副会長　田内竹男

あけましておめでとうございます。八三年の新春を迎え、所属する播磨さつき会の一員として、さつきを通じて愚見を述べさせていただくことを光栄に存じます。

今から三六〇年余昔、山崎町は、城下町として栄えたのがはじまりですが、時代の推移により、町村合併、道路網の整備、交通機関の発達で、各種企業の進出、地場産業の近代化等、勤労者と共に栄え、新らしい町に衣替をしております。

山崎町は、「さつきの町」として全国的にPRするため、さつきマラソンを開催し、全国各地からの参加者が年々増える傾向であります。また町をあげての、さつき祭等の行事をもち多くの人々に親しまれており、すばらしい将来が約束されているのです。

現在計画実施中の、最上山さつき公園も、町民親睦のよりどころとして、共に楽しめる憩の場となることを祈っております。

私もさつき愛好の一人ですが、さつきと無言の対話が続く毎日です。さつきは自然と緑を愛する日本人によって育てられた、わが国、わが里固有の花木だと思います。

古くから、庭園木、また盆栽として、多くの人々に親しまれ愛培されたさつきが、ここ数年のうちに、人気を呼び、趣味園芸のどれよりも、トップを独走して

いる感があります。

さつきの歴史を探ぐると、今日の隆盛は、一時的ブームではなく、さつきだけに見られる、花芸の美しさ、木の育てやすさ、盆栽仕立の容易さ、等があいまって、いつの時代においても、大衆的、庶民的な花木盆栽として親しまれ、人々の間に広まってきたようです。

信心、花作りは、年寄りまかせ、といわれますが、決してそうばかりではありません。

二十一世紀を目指し、さつきの町山崎町の名を高めるため、壮年層の熱意に期待するものが大きく、勤労と健康のエネルギー源として、さつきを愛培し、銘木銘花を育て、花一杯の生活文化を高めていただきたい。

高齢化が進む今日、老後の健康保持と楽しみ、そして老齢年金ならぬ「さつき年金」とシャレてみるのも、一方法ではないでしょうか。私たちも、今後益々栽培技術の研鑽と普及に努力したいと思います。

よろしくご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申しあげます。

「箏」について

邦楽邦舞研究会
菊美会
菊岡美智子

箏がどのような変遷を経て今日に伝えられてきたか、どの様な人達が箏の音楽の為に力をつくしたかを知る為には、古い時代に書かれた書物が唯一の確かなよりどころになると思います。平家物語、紫式部が書きとめた紫式部日記には、宮中に詰めている人達が、つれづれに琴や笛などの管弦をたのしむさまが述べられております。

その後さまざまな歴史を経て、江戸時代より明治、昭和の今日に至る庶民の音楽としての発展は、数々の名曲を生み日本音楽の雅びの心を伝えて参りました。一時、ピアノ等の洋楽器におされ若い人達に、箏、尺八ばなれの感が見えましたが、現在、日本の古典のすばらしい旋律、心にしみる箏、尺八の音色が見直され、心静かに箏の前に座す姿が増えて参りましたことは、この道に励みます私にとりまして、箏が後にまで伝えられていくであろうことを、心強くうれしく思っております。現在では、教授法も楽譜により行なわれる訳ですが、楽譜を見て演奏すると云うことは、その文字をただ棒弾き、棒吹きするのではなく、そこに書かれている音楽を通して、作曲者の心を語ることだと思います。楽譜の裏側に秘められた作曲者の心を習いとることだと思います。要は作曲者の意図するものをいかに表現するかにかかっている訳です。その様に考えますと、奈良、平安時代より脈々と続いて参りました古典を演奏いたしますのは、古きよき時代に息づいた〝もののあわれ〟をどの様に表現していけばいいのか、どの様に演奏すればいいのか、作曲者の心を、まるで手さぐりの状態で感じ取ろうといたしております私にとりまして、一生の大きな宿題だと思っております。

竜田流 山崎小唄会の流れ

秦　耕三

私等の故郷山崎町は、宍粟郡内は云うに及ばず、西播地方でも、粋な色街として、その名を有名にしていましたことはご承知のとおり。大正時代から昭和初期までは、お茶や（料理店）が、三、四十軒もあって繁昌しており、田舎町には珍しく美人揃いの芸妓（者）も五十人ほど働いておりました。その事務所（検番）が伊沢町にあり、芸者の置屋も十軒近く、非常に繁栄していた明るい、住み良い町でありました。

昭和三十五年頃、戦前のような情緒豊かな町づくりにと、今は亡き、元町長村上彰治さん、老松酒造社長前野佐吉さんや、志水義治さん等三氏の発起で、古典芸能・小唄研究会が発足したのであります。

神戸市花隈の龍田流小唄・龍田金龍師匠を招き毎月五日間の稽古を受け、約三十人程が熱心に習ったものです。

四十年頃、一時中断しましたが、四十四年に再興の声が上がり再び金龍師匠を迎えて研究会をつづけております。

今は月三日間ですが、年に一回は大阪、神戸方面で催される、龍田流小唄大会に出席して芸を磨いております。

小唄研究会ができてから二十年余の間に、四十九年に三人、五十六年に四人の名取りができました。その内、発表会を開き、皆さま方のご批判を得る機会を設けたいと存じております。

おわりに、町内の皆様方にも、粋な小唄研究会にご参加くださいまして、故郷の、町づくりにご協力をたまわりたい。

文楽の鑑賞

山群素義会・名賀一二

昭和五十七年三月二十八日、大阪より文楽を招き、山崎中学校に於て、その鑑賞会を開いた。

出演者は、文楽人間国宝・吉田玉男師を始め、三味線、浄るり、人形、裏方等五十数名の大一座で、出しものは、

昼の部

一、絵本太功記十段目　尼ヶ崎の段

二、艶容女舞衣　三勝半七酒屋の段

夜の部

一、伊達娘恋緋鹿子　お七火の見櫓の段

二、曽根崎心中

三、増補大江山　戻り橋の段

で、立派な舞台装置を背景に、皆それぞれの達人が熱演し、文楽愛好家は勿論、初めて見る人や、昼夜合せて約七百名の会員に多大の感銘を与えた。

あの重厚な太三味線のひゞき、鍛えに鍛えた咽を通して語られる力強い浄るり、これに和して演じられる人形の所作、これ等の至芸が三位一体となってかもし出される文楽の妙趣は、誠に見事なものであった。殊にあの人形のかしら、何げなくすました顔が、一旦舞台に臨ぞめば、たちまち血が通い魂がこもって、到底人間わざでは出来ない動きを見せ、義理人情のきびをうがち、思わず観衆を魅了してしまった。これこそ文楽の見どころである。

近頃あらゆる芸能が盛んに行なわれ、今や芸能花ざかりの盛況である。然るに古来大衆芸能の王座を占めていた浄るりや芝居が、地方では全く影をひそめてしまった。このときに当り我が文化連盟では文楽を上演し、古典芸能のよさを見直してもらおうとした。幸い多くの観衆の好評を博し、度々上演の要望が湧き起った。この要請にこたえ、古典芸能鑑賞の機会をもうけることは大切だと思う。

編集後記

「やまさき文化」第二号を送ることとなりました。普通この種の出版物は、創刊号はまず何とかなるのだが、第二号となると原稿は寄らず、内容もがた落ちになるのが通例なので、内心びくびくものだっただけに、スムーズに原稿も集り、内容もまずまずなのでその心配も吹き飛んで、やれやれである。奮って玉稿をお寄せ下さった各界の執筆者各位に対し感謝の念や切なるものがある。

文芸的なものには三号雑誌などといって、三号まで出した処で潰れてしまうものが多く、三号まで出れば上乗といった通念があるが、この「やまさき文化」のような文化誌と、文芸同人誌とは同日の談ではないとはしても、この調子なら、今後息ながく続けられるのではないかといった希望が湧いてくる。

創刊号での編集委員の合評会では、表紙の装訂から後記に至るまで、徹底的に論議の俎上に乗せられたものです。まあその反省の結果としての第二号という訳ではあるのですが、例えば表紙の題字一つにしても、「やまさき」の（き）の字について、年輩の人なら漢字の（支）の字をくずして仮名書きしてあることぐらい御存知ですが、近頃の若い人では、特別にかな書きの書道を習った人でもなければ、大学出でも読めないだろう、書き直してもらったらどうかという論が出ました。

しかし一方では、そんな点で啓蒙してゆくことが文化雑誌の役目とも考えられるし、又一方ではこのような雑誌の大衆性という性格にも考慮が必要だろうし、まあ編集子も色々とうたた今昔の感に堪えずというところです。

＜根岸記＞

◆編集委員

浅田　耕三　荒木　俊介
北川　智恵　北川　泰子
根岸　元彦　藤村　清一
藤村　省三　安井　道夫
和田　秀男　（アイウエオ順）

飛石機械産業からのお願い

人が人として幸せになれる処方箋は何なのか、そのようなことを考え「幸福の泉」なるものにたどりつき、自作自演で20数年を歩いて参りました。46年、会社発足時に経営理念と改め、お客様のご信頼にお答えする為に、それを無限のエネルギーとして全社揚げて取組んでおります。

当社では、企業は社会の公器でなければならないと常に進言し、流通の世界の中で使命感に燃え、生活文化の向上を願って多目的に活躍しておりますので、尚一層のご支援をお願い申し上げます。

〈飛石農機㈱〉〈トビイシ住設㈱〉〈飛石建機㈱〉〈飛石レンタ・リース竜野〉

山交タクシー

山崎神姫バス西隣
電話 07906−2−2166(代表)

幸せへの旅立ちに――。

ふじむら貸衣裳

宍粟郡山崎町山崎181 TEL (07906) 2−0052

たしかな技術で世界をむすぶ
NEC
兵庫日本電気株式会社

兵庫県宍粟郡山崎町須賀沢231番地　☎ 播磨山崎（07906）2－1222㈹

登録商標
SANYO-HAI
山陽盃
高級清酒
名聲轟四海
兵庫県山崎町山崎
山陽盃酒造有限会社

登録商標
老松
スエヒロ
オイマツ
兵庫県山崎町　老松酒造有限会社

地元にひろがる
心のふれあい ―― にしし
西兵庫信用金庫
理事長　杉元清美